第5節　文様の解読

1．縄文式土器の文様の性格

凡そ、土器に限らず、粘土を捏ね造形して焼きあげた器物ほど不可解な物はない。それらの土器や陶器には、使用上の機能をもたせた「形」だけでなく、その表壁には、使用目的とは無関係なさまざまな絵画や文様で色取られている場合が多い。

これらの絵画や文様には、一見、何の変哲もない線や点をはじめ、単純な繰返しでうめられたものから、複雑で極めて意味ありげな奇怪なものまでさまざまである。

ところが、それらのうち、特に陶器の絵画については、多くの学者や美術関係者の考察や論評が聞かれている。ところが縄文式土器となるとさっぱりである。もっとも、縄文式土器には絵画は極めて少なく文様が主体であったからなのかもしれない。縄文式土器の文様についての論評は、せいぜい蛇体文を題材にしたものがみられる程度でしかなかった。

どうしてだろうか。その答は簡単である。縄文式土器の文様は、土器型式を設定し編年を組立てるのに最適の道具以外の何物でもなかったからである。したがって、その結果、土器型式は無数に設定され編年も地方別に誕生し目的は達せられたのである。

しかし、その後には副産物として文様を施した作者の意図を読みとる方法の存在すら忘れ、ただ徒に編年至上主義に陥り他人の設定した土器型式や編年を誹るばかりでなく、ついにはコンピューターまで動員するという結果をまねいてしまった。

本来、土器の文様は、その製作者の考えやその時点での流行・掟・日常生活の状態などが製作者の手先を通じて文様という「形」で意識の有無にかかわらずに表現されていなければならない。

したがって、型式設定や編年組立てには絶好の資料となるはずである。しかし、それだけでは、文様のもつ性格の何分の一にしかならない。これでは、縄文時代の生活の復原が目的であるとする考古学の方法論を疑いたくなってしまう。

2．文様の組成

縄文式土器の文様は、単に型式設定に使用されるだけでないことは前項で述べた通りであるが、それ以外、生活の復原に役立たせるためには、その組成をはっきり把握していなければならない。

それには、文様を詳に観察することから出直さなくては駄目である。例えば、一見して箆削りのざらざらした無文の土器でも、箆削りした膚に謎が秘められているのである。これも一種の文様として扱うべきである。また、この反対に、艶出しした膚でも同様である。次に、1本の線・1個の点のように、それ自体では何の意味も持たないものでも、それらが有機的に結合

した場合には意味を有するようになるものがある。また、はじめから目的をもって描かれた文様も多い。さらに、施された「場」によって意味を持ったり異った意味に変化する場合や複数の意味を持合せることもしばしばで注意しなければならない。

そこで、これらのすべての文様を整理すると次のように二つに大別することができる。

A．基本形態の文様……それ自体では何らの意味ももたないが、連続したり他との結合により性格が発生する。

B．複合形態の文様……基本形態の文様が連続したり結合して組立てられたもの、および、器壁を意図的に調整して表現した調整手法などである。

さて、このように文様は、基本形態とそれらの結合によって出来た複合形態の二つによって成立っていることが判ると、こんどは、それらの施文されている「場」が重要になってくるのである。

従来、すべての文様は、施文される場が一定しているのでなく、器壁のどこにでも好き勝手に施されているものと思い込んでしまっていた。別段、そうしたことに気を使った説に接したことがない。縄文人は、そんなに無神経で無計画な人達では決してなかったはずである。それどころか、細かすぎる程、必要以上に「場」には神経を使っていたからこそ型式の設定にも編年の材料にもなったのである。例えば、八ケ岳山麓の縄文時代中期の土器を評して自由奔放で豪華な造形の土器である。とするなどは土器と文様を知らない人のセリフとしか云いようがない。

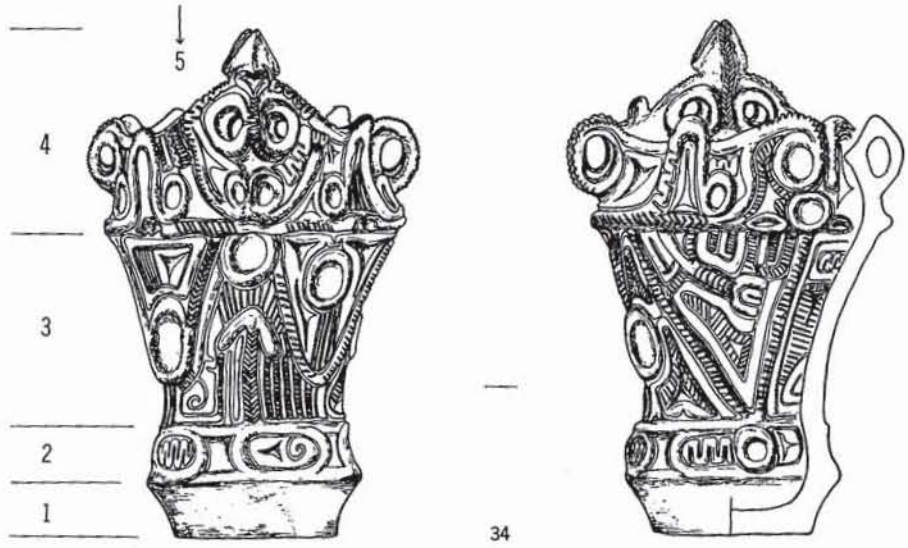
それでは、その場とは何だろうかについて図解することにしよう。（第146・147図）

一般的に、中期の土器の施文構成は、例外はともかく、およそ次のように五つの「基本体」に分割して考えることが可能である。

(1)底部から下胴部、(2)胴部、(3)上胴部から頸部、(4)口縁部から口唇～把手、(5)内壁の五分割である。そこで、これら五分割された表現の場が、どのような展開をしていくのかについて述べてみることにしよう。

まず、(1)は、自分・作者・複数の人々・聚落・大地など最も身近なものを表す場となっている。それから、口唇に向って、およそ土器の成形工程にそって展開されていく。(2)は、日常生活のうち、生産活動の場、人や動物の胴部などを表す。(3)は、生活領域の外、即ち遠景であり、また目的や目的地および自然神への道程を示す山や川をはじめ、地上と空、宇宙・神域との境界を表す地平線・水平線である。また、これらと反対の意味をもつ、雨・雪・雷・風・播種などを表現する場となっている。(4)は、願望・疑問をはじめ空・宇宙・雲などの他、総合的な神域を示す最高の場と決められている。(5)は、浅鉢などのように施文範囲の限定されている器の場合に限り、(4)と同一の意味を表す場となり得るのである。

このように、文様を基本体別に分けて考え、それぞれの場における複合形態の文様を有機的



第146図　区劃文装飾深鉢

に結合させていくと壮大なロマンが見えてくるはずである。ところが、場が理解できても基本形態の文様で構成されている複合形態の文様に意味を持たせて生命を支えることは非常にむずかしく、近代文明に汚染された頭脳をもってしては、とうてい不可能である。それらをすべて洗い流し、縄文の原点に立ち帰って考えなければ、一つとして、その意味を読みとることはできない。

3．文様の解読

区劃文装飾深鉢　（第146図34）

この土器は、32号址発見の土器である。胎土は精選され黄褐色で焼成の良好な土器である。二次加熱を受けた痕跡は少なく実用的な器でなかったらしい。施文構成は、勿論、区劃文が主体を占め、円文と半肉彫三叉文を多用して複雑さを倍増している。

この土器など、従来ならさしずめ、自由奔放豪華絢爛の土器だ。と評価されるものであろう。そこに秘められた作者の心情が入る微塵の隙もあり得なかった。

さて、それでは見直しにかかるとしよう。一見して、これ程セクシーな文様も少ない。男女交合の図である。細かな説明は各自、自分で想定してもらうとして大略を説明しておこう。まず、正面には、男性像が描かれている。大地に腰を据えた座位である。腰部には円文を配して屈折することを示し、それを囲んで半肉彫三叉文と波形文で運動の可能性を現わしている。右足は大地に接し、左足は立膝をもって相絡ませる。右手は拡大した殿膝を弄り左手は首に巻く。胴部は、刻目隆帯が背骨を示し、口縁下部に円文を配して首を表す。頭部は、入組突起をもつ

てかえ、すべて簡略化している。頭部が口唇にまで上らす右に寄せられて、その地位の低さを示している。

背面には、女性像が描かれ、その頭部は口唇よりはるかに上でミミヅク把手となって内向き正面から肩越しに見える。女性像は、大地より上にあり、明らかに女性上位の座位であることが判る。腰部は完全に(4)の位置に昇り神格化している。両足は双方とも立膝を示し左は上にはね上げている。首は双円文をもって左右に動く様を表し頭頂に蛇頭を置く。蛇体文は、農耕神であるばかりでなく特に蝮は性神でもあるので、大きな口を開いた頭頂から右肩にかかる蝮は、性交による恍惚感を如実に示し、その統率力を誇示したものかも知れない。女性器は円文で表現し、下方から綾杉隆帯で飾った矢形の男柱が勢いよく突上げて交合の様をこれまた如実に表現している。

また、女性側の神域には男性器が左右に配され、その直下の上胴部には女性器の畑が配置されて播種の様子が描き出されている。

この様に、この土器に描かれた文様は、単なる性行為の描写だけを表わしただけでなく、それを含めた播種、つまり農耕の基本を示した教典でもあった。それに、その描写力は抜群なもので、科学的であると同時に芸術性も高く、筆者の今の実力では、とうてい満足のいく表現をなし得べくもなかった。

抽象文装飾甕　（第147図124）

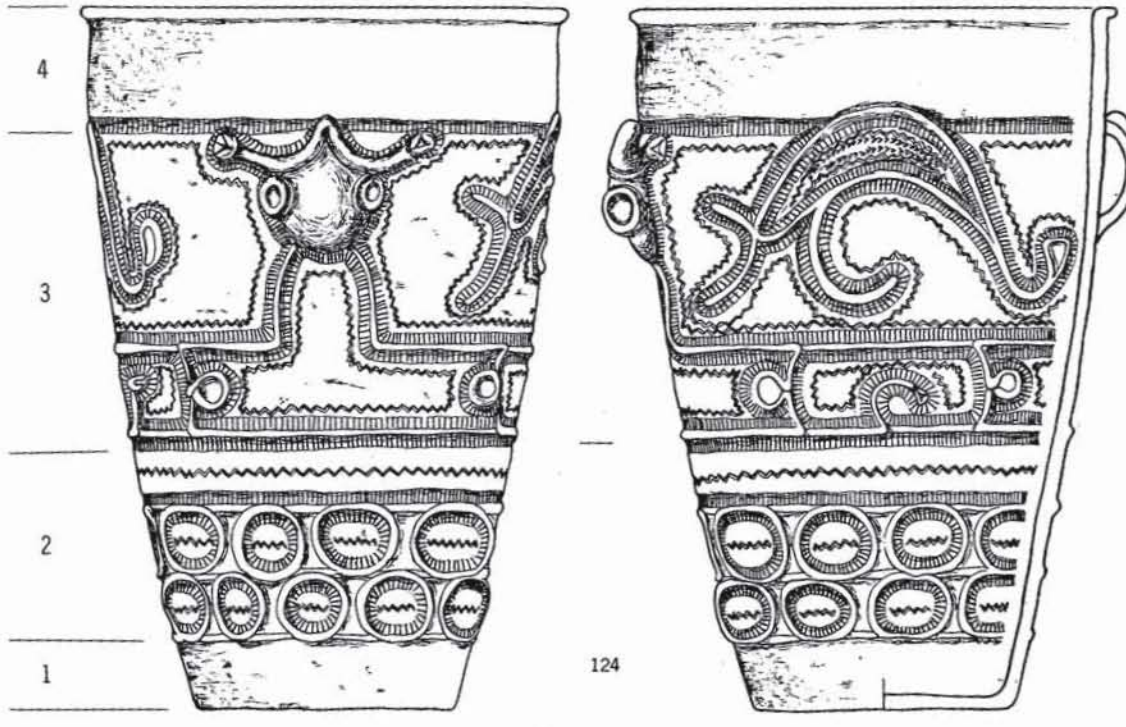
この土器は、76号址の炉中に置かれ、その上に54号址の炉が土器など無視して築かれていた。他人の持物など全く意に介しない点、現在の風潮と以ていて興味をそそる。

土器は底部から下胴部にかけて赤変し、上胴部は茶～黒褐色を呈し煮沸の用に供ししたことが判る。

文様構成は、底部と口縁部が調整された無文帯で、その中間は篦削り成形の上に3区分して施文している。この間は、すべて水中または水に関係する現象を描写している。

まず、(1)の基本体では、3本の隆帯によって区切られた2段の横帯区劃文がある。この区劃は内縁をキャタピラ文で縁取り、中央に山形押引を入れて水の移動する水田を表現している。その上には、大河から引かれた水路が描かれ本格的なイネ栽培の風景を表現している。さて、(2)と(3)の胴部および上胴部には、キャタピラ文によって区切られた支流のある大河が描かれ、中に、水稲農耕神の一つである蛙が2匹と鰐が2匹交互に描き出されている。蛙は、胴と頭が一体となり両目は突出して中空の体部に通じている。手は頭の上に出て泳ぎの状態を示し、両足は、大きく開いて円文の関節部で曲り足首をはね上げている。縁取りはキャタピラ文と山形押引で飾り、水流をけたてて泳ぐ蛙の様を如実に表現している。

次に鰐であるが、これは従来、山椒魚文と呼んでいた抽象文である。山椒魚は主として山間の谷間に生息する両棲類で縄文時代の遺跡と分布が一致しない。鰐とすべきである。鰐は、雌



第147図　抽象文装飾甕

雄が別に表現され、その区別は尾で判断できる。

大河から水を引いて水田を耕やし、その河には蛙を追う鰐の生息する風景といえば、一寸、我国では想像もつかない情景であろう。その源流をどこに求めれば良いのだろうか。中国南部から印度東部にかけての地方に求める以外方法がなかろう。

4．ま　と　め

文様の組成の項で、縄文式土器に加飾されている文様には、基本形態と複合形態の文様があり、それらが、5分割された各基本体の場に、相応の配置をして描出されているという原則を述べておいた。

文様解読の項では、それらの原則にもとづいての解読を試みたのであるが、本稿では、基本・複合の両形態の文様の持つ意味を一行程はぶいて解読に移るという変則な方法をとったので理解しにくかったと思う。しかし、文様に対して、このような見方のあることだけでも理解していただければ目的は半ば達したものと考えている。今回は2例だけの解読にとどめたが、近い将来、こうした方法が必ず盛行するものと確信している。　（武藤雄六）

参考文献　武藤雄六「中期縄文土器の文様解読」　山麓考古2・3・4・5・6号